



Acronis® Backup & Recovery™ 10 Advanced Workstation

Update 5

コマンド ライン リファレンス

目次

1	Windows のコマンドライン モードとスクリプト処理.....	3
1.1	エージェント for Windows コマンドライン ユーティリティ.....	3
1.1.1	サポートされるコマンド.....	3
1.1.2	共通のオプション.....	9
1.1.3	固有のオプション.....	13
1.1.4	trueimagecmd.exe の使用例.....	25
1.2	ストレージ ノード コマンドライン ユーティリティ.....	30
1.2.1	サポートされるコマンド.....	31
1.2.2	オプション.....	32
1.2.3	例.....	34
1.2.4	格納域のエクスポートと複数のアーカイブのインポート.....	35
1.3	スクリプト処理.....	36
1.3.1	スクリプト実行パラメータ.....	36
1.3.2	スクリプトの構造.....	36
1.3.3	スクリプトの使用例.....	38

1 Windows のコマンドライン モードとスクリプト処理

Acronis Backup & Recovery 10 はコマンドライン モードをサポートしているので、XML スクリプトの実行によるバックアップの自動化が可能です。

Acronis Backup & Recovery 10 は、次の追加機能を備えた Acronis True Image Echo コマンドライン ユーティリティを使用します。

1. データ取り込みの前後に実行するコマンドを使用する機能。
2. VSS サポート オプションを使用する機能。
3. /ls_check コマンドを使用してライセンス サーバー上のライセンスを確認する機能。
4. ディスクのバックアップ時にファイルを除外する機能。
5. アーカイブとバックアップをエクスポートする機能。

残りのコマンドとオプションはまったく同じです。 このため、コマンドライン リファレンスでは、Acronis True Image Echo で採用された用語を使用しています。

コマンドライン ログは古い(Echo)形式で保存されるため、Acronis Backup & Recovery 10 ログに変換することはできません。

コマンドライン モードの制限

GUI モードに比べて、コマンドライン モードの機能には多少の制限があります。 次の操作は実行できません。

- システム ボリュームのリカバリ
- リムーバブル メディア(CD、DVD、またはテープ)の挿入など、ユーザーによる操作が必要なタスク。 ドライブにメディアが挿入されていない場合、または挿入されたメディアが正しい場合は、処理に失敗します。

これらの操作は、GUI を通じてのみ実行できます。

スクリプト処理はバックアップのみを対象としています。

1.1 エージェント for Windows コマンドライン ユーティリティ

管理者は、さまざまな状況でコンソール インターフェイスの操作が必要になることがあります。 Acronis Backup & Recovery 10 は、trueimagecmd.exe ユーティリティでこのモードをサポートします。 このファイルは、Acronis Backup & Recovery 10 エージェント for Windows がインストールされているフォルダにあります(デフォルトでは、C:\Program Files\Acronis\BackupAndRecovery)。

このユーティリティは、PE ベースのブータブル メディアから操作する場合でも使用できます。

1.1.1 サポートされるコマンド

trueimagecmd は、次の構文で使います。

```
trueimagecmd /command /option1 /option2...
```

コマンドにはオプションを指定できます。ほとんどの trueimagecmd コマンドで共通のオプションもありますが、個々のコマンドに固有のオプションもあります。下の表に、サポートしているコマンドと使用可能なオプションの一覧を示します。

コマンド	共通のオプション	固有のオプション
create 指定したディスクやパーティションのバックアップイメージを作成します。	/vault:[パス] /arc:[アーカイブ名] /arc_id:[アーカイブ ID] /filename:[ファイル名] /password:[パスワード] /crypt:[AES128 AES192 AES256] /asz:[アーカイブ番号] /net_user:[ユーザー名] /net_password:[パスワード] /ftp_user:[ユーザー名] /ftp_password:[パスワード] /incremental /differential /compression:[0~9] /split:[サイズ (MB)] /oss_numbers /progress:[on off] /reboot /log:[ファイル名] /log_net_user:[リモート ユーザー] /log_net_password:[パスワード] /silent	/harddisk:[ディスク番号] /partition:[パーティション番号] /file_partition:[パーティション文字] /raw /exclude_names:[名前] /exclude_masks:[マスク] /exclude_system /exclude_hidden /before:[データ取り込み前に実行するコマンド] /after:[データ取り込み後に実行するコマンド] /use_vss
filebackup 指定したファイルやフォルダをバックアップします。	/vault:[パス] /arc:[アーカイブ名] /arc_id:[アーカイブ ID] /filename:[ファイル名] /password:[パスワード] /crypt:[AES128 AES192 AES256] /asz:[アーカイブ番号] /net_user:[ユーザー名] /net_password:[パスワード] /ftp_user:[ユーザー名] /ftp_password:[パスワード] /incremental /differential /compression:[0~9] /split:[サイズ (MB)] /reboot /log:[ファイル名] /log_net_user:[リモート ユーザー] /log_net_password:[パスワード] /silent	/include:[名前] /exclude_names:[名前] /exclude_masks:[マスク] /exclude_system /exclude_hidden /before:[データ取り込み前に実行するコマンド] /after:[データ取り込み後に実行するコマンド] /use_vss

<p>deploy</p> <p>MBR を除いたディスクやパーティションをイメージから復元します。</p>	<p>/vault:[パス] /arc:[アーカイブ名] /arc_id:[アーカイブ ID] /filename:[ファイル名] /password:[パスワード] /asz:[アーカイブ番号] /index:N /net_user:[ユーザー名] /net_password:[パスワード] /ftp_user:[ユーザー名] /ftp_password:[パスワード] /oss_numbers /reboot /log:[ファイル名] /log_net_user:[リモート ユーザー] /log_net_password:[パスワード] /silent</p>	<p>/file_partition:[パーティション文字] /harddisk:[ディスク番号] /partition:[パーティション番号] /target_harddisk:[ディスク番号] /target_partition:[パーティション番号] /start:[開始セクタ] /size:[パーティション サイズ (単位はセクタ)] /fat16_32 /type:[アクティブ プライマリ 論理] /preserve_mbr</p> <p>Acronis Universal Restore オプションを使用する場合:</p> <p>/ur_path:[パス] /ur_username:[ユーザー] /ur_password:[パスワード] /ur_driver:[inf ファイル名]</p>
<p>deploy_mbr</p> <p>ディスクやパーティションのイメージから MBR を復元します。</p>	<p>/vault:[パス] /arc:[アーカイブ名] /arc_id:[アーカイブ ID] /filename:[ファイル名] /password:[パスワード] /asz:[アーカイブ番号] /index:N /net_user:[ユーザー名] /net_password:[パスワード] /ftp_user:[ユーザー名] /ftp_password:[パスワード] /reboot /log:[ファイル名] /log_net_user:[リモート ユーザー] /log_net_password:[パスワード] /silent</p>	<p>/harddisk:[ディスク番号] /target_harddisk:[ディスク番号]</p>
<p>filerestore</p> <p>ファイル アーカイブからファイルやフォルダを復元します。</p>	<p>/vault:[パス] /arc:[アーカイブ名] /arc_id:[アーカイブ ID] /filename:[ファイル名] /password:[パスワード] /asz:[アーカイブ番号] /index:N /net_user:[ユーザー名] /net_password:[パスワード] /ftp_user:[ユーザー名] /ftp_password:[パスワード] /reboot /after /log:[ファイル名] /log_net_user:[リモート ユーザー] /log_net_password:[パスワード]</p>	<p>/target_folder:[ターゲット フォルダ] /overwrite:[古いデータ なし 常に] /restore_security:[on off] /original_date:[on off] /include:[名前]</p>

	/silent	
verify アーカイブの整合性をベリファイします。	/vault:[パス] /arc:[アーカイブ名] /arc_id:[アーカイブ ID] /filename:[ファイル名] /password:[パスワード] /asz:[アーカイブ番号] /net_user:[ユーザー名] /net_password:[パスワード] /ftp_user:[ユーザー名] /ftp_password:[パスワード] /reboot /log:[ファイル名] /log_net_user:[リモート ユーザー] /log_net_password:[パスワード] /silent	folder_name:[パス] no_subdir
pit_info 指定したアーカイブに含まれているバックアップの番号の一覧を表示します。	/filename:[ファイル名] /password:[パスワード] /asz:[アーカイブ番号] /net_user:[ユーザー名] /net_password:[パスワード] /ftp_user:[ユーザー名] /ftp_password:[パスワード]	
consolidate 指定したバックアップのみを含むアーカイブの一貫性のあるコピーを作成します。	/include_pits:[ピット番号] /filename:[ファイル名] /password:[パスワード] /ftp_user:[ユーザー名] /ftp_password:[パスワード] /reboot /log:[ファイル名] /log_net_user:[リモート ユーザー] /log_net_password:[パスワード] /silent	/target_filename:[ファイル名] /net_src_user:[ユーザー名] /net_src_password:[パスワード] /net_user:[ユーザー名] /net_password:[パスワード]
export 指定した場所に、アーカイブのコピーまたはアーカイブの自己完結型の部分コピーを作成します。	/vault:[パス] /arc:[アーカイブ名] /arc_id:[アーカイブ ID] /include_pits:[ピット番号] /password:[パスワード] /ftp_user:[ユーザー名] /ftp_password:[パスワード] /progress:[on off] /log:[ファイル名] /log_net_user:[リモート ユーザー] /log_net_password:[パスワード] /silent	/net_src_user:[ユーザー名] /net_src_password:[パスワード] /ftp_src_user:[ユーザー名] /ftp_src_password:[パスワード] /target_vault:[ターゲット パス] /target_arc:[ターゲット アーカイブ名] /net_user:[ユーザー名] /net_password:[パスワード]
convert 仮想コンピュータで使用するための仮想ディスク	/filename:[ファイル名] /password:[パスワード] /asz:[アーカイブ番号]	/target_filename:[ファイル名] /harddisk:[ディスク番号] /vm_type:[vmware esx microsoft parallels]

形式にイメージを変換します。	/index:N /net_user:[ユーザー名] /net_password:[パスワード] /ftp_user:[ユーザー名] /ftp_password:[パスワード] /log:[ファイル名] /log_net_user:[リモート ユーザー] /log_net_password:[パスワード] /silent	/ur /ur_path:[パス]
list 使用可能なドライブとパーティションの一覧を表示します。 filename オプションと共に使用すると、イメージの内容が一覧で表示されます。 vault オプションと共に使用すると、指定した場所にあるアーカイブが一覧で表示されます。 arc または arc_id オプションを追加すると、アーカイブに含まれているすべてのバックアップが一覧で表示されます。	/password:[パスワード] /index:N /asz:[アーカイブ番号] /net_user:[ユーザー名] /net_password:[パスワード] /ftp_user:[ユーザー名] /ftp_password:[パスワード]	/filename:[ファイル名] /vault:[パス] /arc:[アーカイブ名] /arc_id:[アーカイブ ID]
explore イメージを仮想ドライブとして接続します。	/vault:[パス] /arc:[アーカイブ名] /arc_id:[アーカイブ ID] /filename:[ファイル名]* /password:[パスワード] /asz:[アーカイブ番号] /index:N /net_user:[ユーザー名] /net_password:[パスワード] /log:[ファイル名] /log_net_user:[リモート ユーザー] /log_net_password:[パスワード] /silent *分割イメージの場合は、最後に作成したファイルの名前	/partition:[パーティション番号] /letter:X
unplug 仮想ドライブとして接続されたイメージの接続を解除します。		/letter:X /letter:all
asz_create 選択したドライブに Acronis Secure Zone を作	/password:[パスワード] /oss_numbers /reboot /later	/harddisk:X /partition:[パーティション番号] /size:[ASZ サイズ（単位はセクタ） 未割り当て]

成します。	/log:[ファイル名] /log_net_user:[リモート ユーザー] /log_net_password:[パスワード] /silent	
asz_content Acronis Secure Zone のサイズ、空き領域、および内容を表示します。	/password:[パスワード]	
asz_files 生成されたファイル名を使用して、Acronis Secure Zone のサイズ、空き領域、および内容を表示します。	/password:[パスワード]	
asz_delete_files Acronis Secure Zone にあるアーカイブの最新のバックアップを削除します。	/filename:[ファイル名] /password:[パスワード] /log:[ファイル名] /log_net_user:[リモート ユーザー] /log_net_password:[パスワード] /silent	
asz_delete Acronis Secure Zone を削除します。	/password:[パスワード] /oss_numbers /reboot /later /log:[ファイル名] /log_net_user:[リモート ユーザー] /log_net_password:[パスワード] /silent	/partition:[パーティション番号]
asrm_activate Acronis スタートアップリカバリ マネージャを有効にします。		
asrm_deactivate Acronis スタートアップリカバリ マネージャを無効にします。		
clone ハードディスクのクローンを作成します。	/reboot /later /silent	/harddisk:[ディスク番号] /target_harddisk:[ディスク番号]
help 使用方法を表示します。		

ls_check ローカル コンピュータに割り当てられているライセンスがライセンスサーバー上にあるかどうかを確認します。		
---	--	--

1.1.2 共通のオプション

アーカイブへのアクセス

vault:[パス]

アーカイブを含む場所にパスを指定します。arc または arc_id オプションと共に使用します。

次の場所がサポートされています。

- ローカル フォルダ: `/vault:C:\Test` や `/vault:"C:\Test 1"` など
- ネットワーク フォルダ: `/vault:\\ServerA\Share\` など
- 管理対象の格納域 (Advanced エディションのみ):
`/vault:bsp://StorageNode/VaultName` など
- FTP および SFTP: `/vault:ftp://ServerA/Folder1` など
- CD、DVD のローカル パスとして指定したパス: `/vault:F:\` など
- Acronis Secure Zone: `/vault:atis:///asz` など
- テープ: `/vault:atis:///tape?0` など
- 管理対象外の格納域はパスで指定します。たとえば、格納域がフォルダ内にある場合は、パスをそのフォルダに指定します。

vault オプションを指定すると、filename オプションは無視されます。

create、filebackup、filerestore、verify コマンドでは、管理対象の格納域とテープのみがサポートされるため、ご注意ください。

arc:[アーカイブ名]

アーカイブの名前。指定しなかった場合は、arc_id オプションが使用されます。arc オプションと arc_id オプションを両方とも指定した場合は、arc_id オプションが使用されます。

arc_id:[アーカイブ ID]

次のようにアーカイブの UUID (Universally Unique Identifier) を指定します。

```
/arc_id:183DE307-BC97-45CE-9AF7-60945A568BE8
```

このオプションが指定されていない場合は、arc オプションが使用されます。両方のオプションが指定されている場合は、arc_id オプションが使用されます。

filename:[ファイル名]

- a) アーカイブの場所が ASZ 以外の場合は、バックアップ ファイル名。
- b) ASZ からファイルを復元または削除するときは、アーカイブ名。 `asz_files` を使用すると取得できます。

vault オプションを指定すると、**filename** オプションは無視されます。

password:[パスワード]

- a) アーカイブの場所が ASZ 以外の場合は、アーカイブのパスワード。
- b) アーカイブの場所が ASZ のときは、ASZ のパスワード。

asz:[アーカイブの番号]

ASZ のアドレスを指定し、アーカイブ(増分バックアップありまたは増分バックアップなしの完全バックアップ)を選択します。

アーカイブの番号を取得するには、**asz_content** を使用します。

index:N

N = アーカイブ中のバックアップの番号

- 1 = ベースとなる完全バックアップ
- 2 = 1 番目の増分バックアップ(以降、3 = 2 番目、4 = 3 番目...)
- 0(デフォルト) = 最新の増分バックアップ

アーカイブの中の一連の増分バックアップからバックアップを選択します。

ASZ からバックアップのインデックスを取得するには、**asz_content** を使用します。

include_pits: [ピット番号]

アーカイブ コピーに含めるバックアップ ファイル(ピット)を指定します。ピットの番号を取得するには、**pit_info** を使用します。複数の値は、次のようにカンマで区切ります。

```
/include_pits:2,4,5
```

値 "0" は、アーカイブ内の最後のバックアップを指します。例:

```
/include_pits:0
```

指定されていない場合は、アーカイブ全体が選択されます。

net_user:[ユーザー名]

ネットワーク ドライブにアクセスするためのユーザー名を指定します。

net_password:[パスワード]

ネットワーク ドライブにアクセスするためのパスワードを指定します。

ftp_user:[ユーザー名]

FTP サーバーにアクセスするためのユーザー名を指定します。

ftp_password:[パスワード]

FTP サーバーにアクセスするためのパスワードを指定します。

バックアップオプション

incremental

バックアップの種類を増分バックアップに設定します。

バックアップ オプションを指定しない場合、またはベースの完全バックアップが存在しない場合は、完全バックアップが作成されます。

differential

バックアップの種類を差分バックアップに設定します。

バックアップ オプションを指定しない場合、またはベースの完全バックアップが存在しない場合は、完全バックアップが作成されます。

compression:[0...9]

データの圧縮レベルを指定します。

範囲は 0 から 9 までで、デフォルトでは 3 に設定されています。

crypt:[AES128|AES192|AES256]

パスワードで保護されたアーカイブの AES アルゴリズム暗号化のキー サイズを指定します。このオプションは、**/password** 『10ページ』 オプションと共に使用します。たとえば、次のようになります。

```
/password:QWerTY123 /crypt:AES256
```

暗号化キーがランダムに生成され、パスワードの SHA-256 ハッシュをキーとして使用して AES-256 で暗号化されます。パスワード自体はディスクまたはバックアップ ファイルに保存されませんが、パスワードのハッシュがベリファイには使用されます。この 2 段階のセキュリティにより、バックアップ データは権限のないアクセスから保護されますが、失われたパスワードを復元することはできません。

/crypt オプションを指定しなかった場合は、パスワードで保護されたアーカイブは暗号化されません。

split:[サイズ(MB)]

アーカイブの場所が ASZ 以外のときは、指定されたサイズの単位でバックアップを分割します。

一般的なオプション

oss_numbers

/partition オプションのパーティションの番号が、単に昇順の番号ではなく、MBR パーティション テーブルに対応することを宣言します。これは、プライマリ パーティションは番号 1-1、1-2、1-3、1-4 を持ち、論理パーティションは番号 1-5 から始まることを意味します。例えば、ディスク上に、1 つのプライマリ パーティションと 2 つの論理パーティションがある場合、番号は次のようになります。

```
/partition:1-1,1-2,1-3
```

または、

```
/oss_numbers /partition:1-1,1-5,1-6
```

reboot

操作の前（必要な場合）または操作の完了後に、コンピュータを再起動します。

このオプションは、再起動が必要な操作（ロックされたファイルのリカバリ、システム ディスク上の Acronis セキュア ゾーンの作成/削除、システム ディスクのクローン作成など）を実行するときに使用します。コンピュータは自動的に再起動されます。ユーザーがシステムを手動で再起動するまで操作を延期するには、**/later** オプションを追加します。このオプションを使用すると、操作はユーザーが再起動を開始した後に実行されます。

/reboot オプションは、再起動を必要としない操作でも使用できます。このような操作としては、ブータブルメディアを使用したリカバリ、オペレーティング システムによってロックされていないファイルのリカバリ、アーカイブのベリファイ、ほとんどの種類のバックアップなどがあります。このような操作では、再起動は操作の完了後に実行されます。**/later** オプションは必須ではありません。

次の表は、**/reboot** および **/later** オプションを使用した場合と使用しない場合のソフトウェアの動作を示しています。

	再起動が必要	再起動は不要
/reboot /later	操作前に再起動（延期）	操作後に再起動
/reboot	操作前に再起動	操作後に再起動
オプションなし	再起動なし、操作失敗	再起動なし、操作成功

later

ユーザーがシステムを手動で再起動するまで、再起動を延期します。このオプションは、再起動が必要な操作（ロックされたファイルのリカバリ、システム ディスク上の Acronis セキュア ゾーンの作成/削除、システム ディスクのクローン作成など）を実行するときに、**/reboot** オプションと共に使用します。

log:[ファイル名]

指定されたファイル名で現在の処理のログ ファイルを作成します。

log_net_user:[リモート ユーザー]

ネットワーク共有上にログ ファイルを作成する場合は、共有にログオンするためのユーザー名を含めます。

log_net_password:[パスワード]

ネットワーク共有上にログ ファイルを作成する場合は、共有にログオンするためのパスワードを含めます。

silent

コマンドの出力を抑制します。

progress:[on | off]

進行状況の情報(完了した割合)の表示または非表示を指定します。デフォルトでは、表示されるようになっています。

1.1.3 固有のオプション

create

harddisk: [ディスク番号]

イメージ ファイルに含めるハード ディスクを指定します。/list コマンドを使用すると、使用可能なハード ディスクの一覧が表示されます。1 つのイメージに複数のハード ディスクのデータを含めることができます。この場合は、次のように個々のディスク番号をカンマで区切ります。

```
/harddisk:1,3
```

例:

```
/harddisk:DYN
```

このように指定すると、システム内にあるすべてのダイナミック ボリュームがバックアップされます。

partition: [パーティション番号]

イメージ ファイルに含めるパーティションを指定します。/list コマンドを使用すると、使用可能なパーティションの一覧が表示されます。パーティション番号は、次の例のように<ディスク番号>-<パーティション番号> という形式で指定します。

```
/partition:1-1,1-2,3-1
```

ダイナミック ボリュームは、プレフィックス DYN を付けて次のように指定します。

```
/partition:DYN1,DYN2
```

たとえば次のように、ベーシック パーティションとダイナミック ボリュームの両方をドライブ文字で指定することができます。

```
/partition:"C"
```

たとえば次のように、混在した表記も使用できます。

```
/partition:1-1,"D"
```

file_partition:[パーティションのドライブ文字]

イメージ ファイルを格納するパーティションを(ドライブ文字または番号で)指定します。このオプションは、**filename:[ファイル名]** と共に使用します。その場合は、ドライブ文字またはルート フォルダを付加せずにファイル名を指定する必要があります。たとえば、次のようにします。

```
/file_partition:D /filename:"\1.tib"
```

ダイナミック ボリュームは、プレフィックス **DYN** を付けて次のように指定します。

```
/file_partition:DYN1 /filename:"\1.tib"
```

raw

このオプションを使用すると、認識されないファイル システムやサポートされていないファイル システムのディスク(パーティション)イメージを作成することができます。この処理では、セクタ単位でディスク/パーティションのすべての内容がコピーされます。このオプションを使用しなかった場合は、(サポートされているファイル システムの)システムやユーザー データが含まれているセクタのみがイメージに保存されます。

progress:[on | off]

進行状況の情報(完了した割合)の表示または非表示を指定します。デフォルトでは、表示されるようになっています。

exclude_names:[名前]

バックアップから除外するファイルやフォルダの名前(カンマ区切り)。たとえば、次のようにします。

```
/exclude_names:E:\MyProject\111.doc,E:\MyProject\Old
```

exclude_masks:[マスク]

バックアップから除外するファイルを選択するためのマスクを適用します。一般的な Windows マスク ルールを使用します。たとえば、**.exe** 拡張子の付いたすべてのファイルを除外するには、***.exe** を追加します。**My???.exe** とした場合は、5 文字で最初が「My」で始まる名前の **.exe** ファイルをすべて除外します。

exclude_hidden

バックアップからすべての隠しファイルを除外します。

before:[データ取り込みの前に実行するコマンド]

バックアップ処理の始めに、データを取り込む前に自動的に実行するコマンドを定義できます。たとえば、次のようにします。

```
/before:"net stop MSSQLSERVER"
```

after:[データ取り込みの後に実行するコマンド]

バックアップ処理の始めに、データを取り込んだ後で自動的に実行するコマンドを定義できます。たとえば、次のようにします。

```
/after:"net start MSSQLSERVER"
```

use_vss

バックアップが開始されようとしていることを VSS 対応のアプリケーションに通知します。これにより、データ スナップショットを作成する時点において、特にすべてのデータベース トランザクションの完了など、アプリケーションが使用するすべてのデータについて整合性のある状態を維持できます。データの整合性により、アプリケーションは正しい状態で復元され、復元直後から動作可能になります。

filebackup

include: [名前]

バックアップ アーカイブ ファイルに含むファイルやフォルダ(カンマ区切り)。たとえば、次のようにします。

```
/include:E:\Workarea\MyProject
```

exclude_names: [名前]

バックアップから除外するファイルやフォルダの名前(カンマ区切り)。たとえば、次のようにします。

```
/exclude_names:E:\MyProject\111.doc,E:\MyProject\Old
```

exclude_masks:[マスク]

バックアップから除外するファイルを選択するためのマスクを適用します。一般的な Windows マスク ルールを使用します。たとえば、**.exe** 拡張子の付いたすべてのファイルを除外するには、***.exe** を追加します。**My???.exe** とした場合は、5 文字で最初が「My」で始まる名前の **.exe** ファイルをすべて除外します。

exclude_system

バックアップからすべてのシステム ファイルを除外します。

exclude_hidden

バックアップからすべての隠しファイルを除外します。

before:[データ取り込みの前に実行するコマンド]

バックアップ処理の始めに、データを取り込む前に自動的に実行するコマンドを定義できます。たとえば、次のようにします。

```
/before:"net stop MSSQLSERVER"
```

after:[データ取り込みの後に実行するコマンド]

バックアップ処理の始めに、データを取り込んだ後で自動的に実行するコマンドを定義できます。たとえば、次のようにします。

```
/after:"net start MSSQLSERVER"
```

use_vss

バックアップが開始されようとしていることを VSS 対応のアプリケーションに通知します。これにより、データ スナップショットを作成する時点において、特にすべてのデータベース トランザクションの完了など、アプリケーションが使用するすべてのデータについて整合性のある状態を維持できます。データの整合性により、アプリケーションは正しい状態で復元され、復元直後から動作可能になります。

deploy

file_partition:[パーティションのドライブ文字]

イメージ ファイルを格納するパーティションを(ドライブ文字または番号で)指定します。このオプションは、**filename:[ファイル名]** と共に使用します。その場合は、ドライブ文字またはルート フォルダを付加せずにファイル名を指定する必要があります。たとえば、次のようにします。

```
/file_partition:D /filename:"\1.tib"
```

ダイナミック ボリュームは、プレフィックス DYN を付けて次のように指定します。

```
/file_partition:DYN1 /filename:"\1.tib"
```

harddisk: [ディスク番号]

復元するベーシック ハード ディスクを指定します。

partition: [パーティション番号]

復元するパーティションを指定します。

ダイナミック ボリュームは、プレフィックス DYN を付けて次のように指定します。

```
/partition:DYN1
```

target_harddisk: [ディスク番号]

イメージの復元先となるハード ディスクの番号を指定します。

例:


```
/target_harddisk:DYN
```

このように指定すると、システム内にあるすべてのダイナミック ディスク上の未割り当ての領域が選択されます。

target_partition: [パーティション番号]

パーティションの復元先となる既存のパーティションの番号を指定します。このオプションを指定しなかった場合、復元先のパーティション番号は partition オプションで指定したパーティション番号と同じであると見なされます。

ダイナミック ボリュームは、プレフィックス DYN を付けて次のように指定します。

```
/target_partition:DYN1
```

start:[開始セクタ]

パーティションを復元するハード ディスクの未割り当て領域上の開始セクタを設定します。

size:[パーティションのサイズ(セクタ単位)]

新しいパーティションのサイズをセクタ単位で設定します。

fat16_32

復元後にパーティション サイズが 2GB を超えそうな場合に、ファイル システムを FAT16 から FAT32 に変更することができます。このオプションを指定しないと、復元されたパーティションはイメージのファイル システムを継承します。

type:[active | primary | logical]

復元されるパーティションをアクティブ、プライマリ、または論理に設定します(可能な場合。たとえば、ディスク上に 4 つを超えるプライマリ パーティションは存在できないため、このような場合は実行されません)。アクティブに設定されたパーティションは常にアクティブになりますが、プライマリに設定されたパーティションはアクティブにならない場合があります。

種類が指定されていない場合は、復元先のパーティションの種類が保持されます。復元先のパーティションがアクティブの場合、復元されるパーティションはアクティブに設定されます。復元先のパーティションがプライマリでディスク上に他のプライマリ パーティションが存在する場合、それらの 1 つがアクティブに設定され、復元されるパーティションはプライマリになります。ディスク上にプライマリ パーティションが存在しない場合、復元されるパーティションはアクティブに設定されます。

未割り当て領域にパーティションを復元するときは、イメージからパーティションの種類が取り出されます。プライマリ パーティションに対しては、次のように種類が設定されます。

- 復元先のディスクが BIOS で起動順位が 1 番目に設定されていて、他にプライマリ パーティションが存在しない場合、復元されるパーティションはアクティブに設定されます。
- 復元先のディスクが BIOS で起動順位が 1 番目に設定されていて、他にプライマリ パーティションが存在する場合、復元されるパーティションは論理に設定されます。

- 復元先のディスクが BIOS で起動順位が 2 番目以降に設定されている場合、復元されるパーティションは論理に設定されます。

preserve_mbr

既存のパーティションの上にパーティションが復元される場合、復元先のパーティションはディスクから削除され、同時に復元先ディスクの MBR のエントリも削除されます。次に、**preserve_mbr** オプションが指定されていると、復元されるパーティションのエントリは、復元先のディスクの MBR の上位の空の位置を使用します。これにより、復元先ディスクの MBR は保存されます。このオプションが指定されていない場合、復元されるパーティションのエントリは、イメージ中の元のディスクの MBR と同じ位置を使用します。その位置が空でない場合、既存のエントリは他の位置に移動されます。

Universal Restore 固有のオプション

Acronis Backup & Recovery 10 で Universal Restore アドオンを使用するときは、次のオプションを利用できます。

ur_path:[パス]

Acronis Universal Restore の使用と、ドライバ記憶装置へのパスを指定します。

ur_username:[ユーザー名]

Acronis Universal Restore とユーザー名の使用を指定します。

リモート コンピュータ上の場所にアクセスするときは、リモート リソースへのアクセスに使用するサービスに応じてユーザー名が異なります。たとえば、リモート リソースが、ワークグループ コンピュータ上にある共有フォルダの場合、ユーザー名にリモート コンピュータ名("コンピュータ名\ユーザー名")を含める必要があります。リモート リソースが FTP サーバー上にあるときは、コンピュータ名を指定する必要はありません。ターゲット コンピュータとローカル コンピュータが異なるドメインのメンバのときは、ターゲット コンピュータがメンバとなっているドメインの名前(たとえば、"ドメイン名\ユーザー名")をユーザー名に含める必要があります。

ur_password:[パスワード]

Acronis Universal Restore と、**ur_username** オプションの値に関連付けられたパスワードの使用を指定します。

ur_driver:[INF ファイル名]

Acronis Universal Restore の使用と、大容量記憶装置のドライバのインストールを指定します。

deploy_mbr

harddisk: [ディスク番号]

復元する MBR が格納されたベーシック ハード ディスクを指定します。

target_harddisk: [ディスク番号]

MBR の配置先となるターゲット ハード ディスクを指定します。

filerestore

target_folder: [ターゲット フォルダ]

フォルダ/ファイルの復元先のフォルダを指定します(ターゲット フォルダ)。指定されていない場合は、バックアップ アーカイブから元のパスが再度作成されます。

overwrite:[older | never | always]

このオプションを使用すると、復元されるバックアップの作成以降に発生したデータの変更を保持できます。このオプションでは、復元先フォルダにアーカイブ内のファイルと同じ名前のファイルがあるときの処理を選択します。

- *older* — アーカイブまたはディスクのどちらであるかにかかわらず、最新のファイル変更を優先させます。
- *never* — ハード ディスク上のファイルをバックアップ アーカイブ ファイルより無条件に優先させます。
- *always* — アーカイブ ファイルをハード ディスク上のファイルより無条件に優先させます。

指定されていない場合は、ディスク上のファイルは常にアーカイブ ファイルに置き換えられます。

restore_security: [on | off]

ファイルのセキュリティ属性を復元する(デフォルト)か、ファイルが復元先のフォルダのセキュリティ設定を継承するかを指定します。

original_date: [on | off]

アーカイブからファイルの元の日付と時刻を復元するか、復元したファイルに現在の日付と時刻を割り当てるかを指定します。指定されていない場合は、現在の日付が割り当てられます。

include: [名前]

ファイル バックアップから復元するファイルとフォルダをカンマで区切って指定します。

たとえば、次のようになります。

```
/include:D:\MyFolder1,D:\MyFolder2\file_1.exe
```

指定しない場合は、ファイル バックアップのすべての内容が復元されます。

verify

folder_name:[パス]

検証するアーカイブが含まれているローカル フォルダのパスを指定します。

たとえば、次のようになります。

```
/folder_name:D:\MyFolder
```

デフォルトでは、フォルダとそのサブフォルダに保存されているすべてのアーカイブが検証されます。サブフォルダを検証の対象から外すには、`/no_subdir` 『20ページ』 オプションを追加します。

no_subdir

このオプションは、`/folder_name` 『19ページ』 オプションと共に使用します。指定したフォルダのサブフォルダに保存されているアーカイブが検証されなくなります。

たとえば、次のようになります。

```
/folder_name:D:\MyBackups /no_subdir
```

このオプションを指定しなかった場合は、親フォルダとサブフォルダに保存されているすべてのアーカイブが検証されます。

consolidate

target_filename: [ファイル名]

作成するアーカイブ コピーのパスと名前を指定します。コピーに 2 つ以上のバックアップ ファイル(ピット)が含まれる場合は、ファイルの名前に番号が追加されます。

net_src_user:[ユーザー名]

元のアーカイブにアクセスするためにネットワーク共有にログオンするときに使用するユーザー名を指定します。

net_src_password:[パスワード]

元のアーカイブにアクセスするためにネットワーク共有にログオンするときに使用するパスワードを指定します。

net_user:[ユーザー名]

作成されたアーカイブを保存するためにネットワーク共有にログオンするときに使用するユーザー名を指定します。

net_password:[パスワード]

作成されたアーカイブを保存するためにネットワーク共有にログオンするときに使用するパスワードを指定します。

export

net_src_user:[ユーザー名]

元のアーカイブにアクセスするためにネットワーク共有にログオンするときに使用するユーザー名を指定します。

net_src_password:[パスワード]

元のアーカイブにアクセスするためにネットワーク共有にログオンするときに使用するパスワードを指定します。

ftp_src_user:[ユーザー名]

ソース アーカイブにアクセスするために FTP/SFTP サーバーにログオンするときに使用するユーザー名を指定します。

ftp_src_password:[パスワード]

ソース アーカイブにアクセスするために FTP/SFTP サーバーにログオンするときに使用するパスワードを指定します。

target_vault:[ターゲット パス]

アーカイブのエクスポート先にパスを指定します。

次のエクスポート先がサポートされています。

- ローカル フォルダ: `/target_vault:C:\Test`、`/vault:"C:\Test 1"` など
- ネットワーク フォルダ: `/target_vault:\\ServerA\Share\` など
- 管理対象の格納域(アドバンスド エディション のみ):
`/target_vault:bsp://StorageNode/VaultName` など
- FTP および SFTP: `/target_vault:ftp://ServerA/Folder1` など
- CD、DVD - ローカル パス(`/target_vault:F:\` など)として指定したパスを使用
- Acronis Secure Zone: `/target_vault:atis:///asz` など
- テープ: `/target_vault:atis:///tape?0` など
- 管理対象外の格納域はパスで指定します。たとえば、格納域がフォルダ内にある場合は、パスをそのフォルダに指定します。

target_arc:[ターゲット アーカイブ名]

ターゲット アーカイブの名前。ターゲット フォルダ内で一意である必要があります。同じ名前のアーカイブがある場合、処理は失敗します。

net_user:[ユーザー名]

作成されたアーカイブを保存するためにネットワーク共有にログオンするときに使用するユーザー名を指定します。

net_password:[パスワード]

作成されたアーカイブを保存するためにネットワーク共有にログオンするときに使用するパスワードを指定します。

convert

target_filename: [ファイル名]

作成する仮想ディスク ファイルのパスと名前を指定します。仮想ディスクを追加する仮想コンピュータに対応するファイル拡張子は次のとおりです。

- VMware 仮想コンピュータ - **.vmdk**
- MS 仮想コンピュータおよび Citrix XenServer - **.vhd**
- Parallels 仮想コンピュータ - **.hdd**

harddisk: [ディスク番号]

変換するハード ディスクをディスク番号で指定します。それぞれのディスクに対して、別の仮想ディスクが作成されます。

例:

```
/harddisk:DYN
```

このように指定すると、システム内にあるすべてのダイナミック ボリュームが変換されます。

vm_type:[vmware|esx|Microsoft|parallels]

仮想ディスクを追加する仮想コンピュータの種類を指定します。

ur

Windows を含むディスクのイメージを変換するときに使用します。作成された仮想ディスクは起動可能になります。このキーを使用すると、**vm_type** キーで選択した種類の仮想コンピュータに必要なドライバが、作成される仮想ディスクに追加されます。同じ種類の仮想コンピュータからイメージを取得したときは、通常、このキーを指定する必要はありません。

仮想コンピュータのドライバはストレージ内にあり、レジストリ キー

`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Acronis\UniversalRestore\DriversPackPath` で定義されています。ストレージが移動されているときは、キーを変更するか、コマンド **ur_path:[パス]** を使用してください。

ur_path:[パス]

仮想コンピュータのドライバ記憶装置へのカスタム パスの **ur** と同じです。

list

filename:[ファイル名]

このオプションを使用すると、イメージの内容が表示されます。

イメージにディスクのすべてのパーティションが含まれていない場合、イメージの内容一覧にあるパーティション番号がドライブ/パーティション一覧の番号と一致しないことがあります。たとえば、イメージにパーティション 2-3 と 2-5 が含まれている場合、これらは 2-1 と 2-2 として表示されます。

deploy /partition コマンドを使用して、イメージ中のパーティションを物理番号で検出できない場合は、**partition:<イメージ中の番号> /target_partition:<ターゲット パーティションの物理番号>** キーを使用してください。たとえば、前述の例でパーティション 2-5 を元の場所に復元するには、次のようにします。

```
/partition:2-2 /target_partition:2-5
```

vault オプションを指定すると、**filename** オプションは無視されます。

vault:[パス]

アーカイブを一覧で表示する場所にパスを指定します。アーカイブ名と一緒に、**arc_id** オプションで使用されている Universally Unique Identifier (UUID) が一覧で表示します。

次の場所がサポートされています。

- ローカル フォルダ: `/vault:C:\Test`、`/vault:"C:\Test 1"` など
- ネットワーク フォルダ: `/vault:\\ServerA\Share\` など
- 管理対象の格納域(アドバンスド エディション のみ):
`/vault:bsp://StorageNode/VaultName` など
- FTP および SFTP: `/vault:ftp://ServerA/Folder1` など
- CD、DVD - ローカル パス(`/vault:F:\` など)として指定したパスを使用
- Acronis Secure Zone: `/vault:atis:///asz` など
- テープ: `/vault:atis:///tape?0` など
- 管理対象外の格納域はパスで指定します。たとえば、格納域がフォルダ内にある場合は、パスをそのフォルダに指定します。

vault オプションを指定すると、**filename** オプションは無視されます。

arc:[アーカイブ名]

格納域のオプションと共に使用します。アーカイブに含まれているすべてのバックアップを一覧表示します。

指定しなかった場合は、**arc_id** オプションが使用されます。**arc** オプションと **arc_id** オプションを両方とも指定した場合は、**arc_id** オプションが使用されます。

arc_id:[アーカイブ ID]

格納域のオプションと共に使用します。選択したアーカイブのすべてのバックアップを一覧表示します。

指定しなかった場合は、**arc** オプションが使用されます。**arc** オプションと **arc_id** オプションを両方とも指定した場合は、**arc_id** オプションが使用されます。

explore

partition: [パーティション番号]

仮想ドライブとしてマウントする一連のパーティションを指定します。このオプションを指定しないと、イメージに格納されているすべてのパーティションがマウントされます。

このオプション用のパーティション番号を取得するには、**/list/filename** コマンドを使用してイメージの内容を一覧表示し、**idx** 列の番号を使用します。

letter:X

マウントしたドライブにドライブ文字を割り当てます。このオプションは、**partition** オプションと共にのみ使用します。

unplug

letter:X

接続を切断する仮想ドライブをドライブ文字で指定します。

letter:all

すべての仮想ドライブの接続を切断します。

asz_create

harddisk:X

Acronis Secure Zone を作成するハード ディスク番号を指定します。

partition: [パーティション番号]

Acronis Secure Zone 作成用の空き領域の確保元となるパーティションを指定します。

size:[ASZ のサイズ(セクタ単位) | unallocated]

Acronis Secure Zone のサイズをセクタ単位で設定します。

サイズが指定されていないときは、**partition** オプションで選択されている最大値(すべてのパーティションの未割り当て領域と空き領域)と最小値(約 35MB)の間の平均値に設定されます。

いずれの場合も、未割り当て領域が最初に使用されます。十分な未割り当て領域がない場合、選択したパーティションは縮小されます。ロックされているパーティションのサイズを変更すると再起動が必要になります。

「unallocated」を指定すると、ディスク上のすべての未割り当て領域がゾーンによって使用されます。必要に応じて、パーティションは移動されますが、サイズは変更されません。ロックされているパーティションが移動されると再起動が必要になります。**partition** オプションは無視されます。

asz_delete

partition: [パーティション番号]

削除した Acronis Secure Zone を空き領域として追加するパーティションを指定します。複数のパーティションを指定した場合、領域は各パーティションのサイズに基づいて分配されます。

clone

harddisk:[ディスク番号]

新しいハード ディスクにクローン作成する、クローン元のハード ディスクを指定します。

target_harddisk: [ディスク番号]

ソース ハード ディスクのクローン作成先となるターゲット ハード ディスクを指定します。

1.1.4 trueimagecmd.exe の使用例

イメージ ディスクとパーティション

- 次のコマンドは、パーティション 2-1 と 1-3 のイメージを 1.tib という名前で作成します。

```
trueimagecmd /create /filename:"C:\Test\1.tib" /partition:2-1,1-3
```

このイメージは、C:\Test\ フォルダに保存されます。

- 次のコマンドは、パーティション 2-1 と 1-3 のイメージを Acronis Secure Zone に作成します。

```
trueimagecmd /create /asz /partition:2-1,1-3
```

- 次のコマンドは、パーティション 2-1 と 1-3 のイメージを 1.tib という名前で作成します。

```
trueimagecmd /create /filename:"\Test\1.tib" /partition:2-1,1-3  
/file_partition:3-1
```

このイメージは、パーティション 3-1 の \Test フォルダに保存されます。

- 次のコマンドは、ハード ディスク 2 の 1.tib という名前のイメージに増分イメージを追加します。

```
trueimagecmd /create /filename:"C:\Test\1.tib" /password:qwerty  
/harddisk:2 /reboot /raw /incremental /compression:5 /split:640  
/progress:off
```

イメージは、パスワード「qwerty」で保護され、640MB 単位で分割され、すべてのクラスタ データが格納された状態で、C:\Test\ フォルダに保存されます。イメージの圧縮レベルは 5 です。処理の完了後にサーバーは再起動されます。

- 次のコマンドは、パーティション 2-1 のイメージを arc.tib という名前で共有フォルダ \\server1\folder に作成します。

```
trueimagecmd /create /partition:2-1 /filename: \\server1\folder\arc.tib  
/net_user:user1 /net_password:pw1 /log: \\server2\dir\log1.log  
/log_net_user:user2 /log_net_password:pw2
```

処理のログ ファイル log1.log は、別の共有フォルダ \\server2\dir\ に保存されます。両方の共有フォルダのログイン情報を指定します。

- 次のコマンドは、パーティション 2-1 のイメージを FTP サーバー上の archive.tib ファイルに作成します。

```
trueimagecmd /create /partition:2-1 /filename:ftp://server/folder/archive.tib  
/ftp_user:usr1 /ftp_password:pswd1
```

ディスクとパーティションの復元

- 次のコマンドは、パーティション 2-1 を、イメージ 1.tib から元の場所に復元します。

```
trueimagecmd /deploy /filename:"C:\Test\1.tib" /partition:2-1
```

- 次のコマンドは、パスワード「qwerty」で保護されたイメージ 1.tib から、ハード ディスク 2 を元のハード ディスクに復元します。

```
trueimagecmd /deploy /filename:"C:\Test\1.tib" /password:qwerty  
/harddisk:2
```

- 次のコマンドは、イメージ 1.tib に格納されているパーティション 2-1 をパーティション 1-1 に復元します。

```
trueimagecmd /deploy /filename:"C:\Test\1.tib" /partition:2-1  
/target_partition:1-1
```

- 次のコマンドは、イメージ 1.tib に格納されているパーティション 2-1 をハード ディスク 3 に復元します。

```
trueimagecmd /deploy /filename:"C:\Test\1.tib" /partition:2-1  
/target_harddisk:3 /start:63 /size:64000 /type:logical
```

ディスク 3 のセクタ 63 を開始位置として新しい論理パーティションが作成されます。このパーティションは約 64,000 セクタを占有し、正確なサイズはディスク構造とファイル システムの種類によって異なります。

- 次のコマンドは、イメージ Server30Cdrive.tib に格納され、パスワード「123qwe」で保護されたパーティション 1-1 をパーティション 2-1 に復元します。復元されたパーティションの種類はアクティブになります。

```
trueimagecmd /deploy /filename:z:\Server30Cdrive.tib /partition:1-1  
/target_partition:2-1 /type:active /password:123qwe
```

- 次のコマンドは、ハード ディスク 1 のイメージから同じハード ディスク 1 に MBR を復元します。このイメージは、パスワード「pswd」で保護された Acronis Secure Zone にある、アーカイブ番号 2 に作成された 3 番目のバックアップに格納されています。

```
trueimagecmd /deploy_mbr /harddisk:1 /asz:2 /index:3 /password:pswd
```

- 次のコマンドは、ハード ディスク 1 のイメージからハード ディスク 2 に MBR を復元します。このイメージは、FTP サーバーにある arc.tib ファイルに格納されています。

```
trueimagecmd /deploy_mbr /harddisk:1 /target_harddisk:2  
/filename:ftp://server/folder/arc.tib /ftp_user:fuser  
/ftp_password:fpswd
```

ファイルのバックアップ

- 次のコマンドは、D:\Workarea にある MyProject フォルダから、Old サブフォルダ内のファイルと隠しファイルを除くすべてのファイルを Myproject.tib ファイルにバックアップし、このファイルを E:\Backups フォルダに保存します。

```
trueimagecmd /filebackup /filename:E:\Backups\Myproject.tib  
/include:D:\Workarea\MyProject /exclude_names: D:\Workarea\MyProject\Old  
/exclude_hidden
```

ファイルの復元

- 次のコマンドは、E:\Backups\Myproject.tib のすべてのファイルを元のフォルダに復元し、ファイルに元の日付と時刻を割り当てます。

```
trueimagecmd /filerestore /filename:E:\Backups\Myproject.tib  
/original_date
```

/overwrite オプションが指定されていないため、最新のファイル変更は元の内容に置き換えられます。

バックアップの統合

- 次のコマンドは、ネットワーク共有 \\smbsrv\Archives\ にあるアーカイブ Kons.tib に含まれているバックアップの番号の一覧を表示します。

```
trueimagecmd /pit_info /filename:\\smbsrv\Archives\Kons.tib
```

```
C:\Program Files\Acronis\BackupAndRecovery>trueimagecmd /pit_info
/filename:\\srv\elen1\kons.tib
Pit number: 1
    type: image; kind: base; date: 6/27/2009 11:39:10 AM
Pit number: 2
    type: image; kind: incremental; date: 6/27/2009 11:43:13 AM
Pit number: 3
    type: image; kind: incremental; date: 6/27/2009 11:44:04 AM
Pit number: 4
    type: image; kind: incremental; date: 6/27/2009 11:48:22 AM
Pit number: 5
    type: image; kind: incremental; date: 6/27/2009 11:50:32 AM
```

処理が成功しました。

- 次のコマンドは、Kons_new.tib(アーカイブ \\smbsrv\Archives\Kons.tib のピット 2、統合前は \\smbsrv\Archives\Kons2.tib)、Kons_new2.tib(ピット 4、統合前は \\smbsrv\Archives\Kons4.tib)、および Kons_new3.tib(ピット 5、統合前は \\smbsrv\Archives\Kons5.tib)の 3 つのファイルで構成されたアーカイブをディスク D: 上に作成します。

```
trueimagecmd /consolidate /filename:\\smbsrv\Archives\Kons.tib
/target_filename:D:\Kons_new.tib /include_pits:2,4,5
```

バックアップのエクスポート

- 次のコマンドは、D:\Backups にあるアーカイブ (Archive 1) から FTP サーバー (Server22/Vault3) の新しいアーカイブ (Archive 1) に 3 つのバックアップ (ピット) をエクスポートします。

```
trueimagecmd /export /vault:D:\Backups /arc:"Archive 1" /include_pits:2,4,5
/target_vault:ftp://Server22/Vault3 /target_arc:"Archive 2"
/ftp_user:"user" /ftp_password:"password" /progress:on
```

- 次のコマンドは、管理対象の格納域 "Vault1" にあるアーカイブ (Archive 1) からネットワーク共有 (Server15\Backups) の新しいアーカイブ (Archive 2) に 2 つのバックアップ (ピット) をエクスポートします。

```
trueimagecmd /export /vault:bsp://StorageNode/Vault1 /arc:"Archive 1"
/include_pits:2,3
/net_src_user:"user" /net_src_password:"password"
/target_vault:\\Server15\Backups\
/target_arc:"Archive 2" /net_user:"user" /net_password:"password" /progress:on
```

仮想ディスクへのイメージの変換

- 次のコマンドは、ファイル C:\MyBackup.tib に格納されているディスク 1 と 3 のイメージを、VMware タイプの仮想コンピュータで使用する仮想ディスク C:\MyHDD.vmdk と C:\MyHDD2.vmdk に変換します。

```
trueimagecmd /convert /filename:C:\MyBackup.tib
/target_filename:C:\MyHDD.vmdk /vm_type:vmware /harddisk:1,3
```

List

- 次のコマンドは、利用可能なパーティションの一覧を表示します。

```
trueimagecmd /list
```

- 次のコマンドは、Acronis Secure Zone にある最新のイメージの内容を一覧表示します。

```
trueimagecmd /list /asz
```

- 次のコマンドは、指定したイメージの内容を一覧表示します。

```
trueimagecmd /list /filename:"C:\My Folder\Backup.tib"
```

- 次のコマンドは、指定した場所にあるすべてのアーカイブとその UUID を一覧表示します。

```
trueimagecmd /list /vault:D:Backups
```

- 次のコマンドは、指定したアーカイブのすべてのバックアップを一覧表示します。

```
trueimagecmd /list /vault:D:Backups /arc:"Archive 1"
```

割り当てられたライセンスの確認

- 次のコマンドは、ローカル コンピュータに割り当てられているライセンスがライセンスサーバー上にあるかどうかを確認します。

```
trueimagecmd /ls_check
```

このコマンドを実行すると、ローカル コンピュータで使用されているライセンスの一覧が次の形式で表示されます。

```
SKU | (trial)/empty | valid/invalid
```

空の "trial" フィールドは、そのコンピュータに標準のライセンスが割り当てられていることを示します。

例:

```
Acronis Backup & Recovery 10 Advanced Server    (trial)    invalid
Acronis Backup & Recovery 10 Advanced Server                valid
```

Acronis セキュアゾーン: アーカイブ番号によるバックアップの管理

- 次のコマンドは、Acronis セキュア ゾーンのサイズ、空き領域、および内容を表示します。

```
trueimagecmd /asz_content
```

Acronis セキュア ゾーンの内容が次のようになっているとします。

```
C:\Program Files\Acronis\BackupAndRecovery>trueimagecmd /asz_content
ASZ size: 34.439 GB
ASZ free space: 34.409 GB
ARCHIVE number: 1
    index: 1; type: file, base; creation time: 4/2/2009 3:52 PM
ARCHIVE number: 2
    index: 1; type: file, base; creation time: 4/2/2009 4:04 PM
    index: 2; type: file, incremental; creation time: 4/4/2009 6:31 PM
    index: 3; type: file, incremental; creation time: 4/4/2009 6:32 PM
```

この例では、Acronis セキュア ゾーンに 2 つのアーカイブが含まれています。古いアーカイブ #1 は、**2009 年 4 月 2 日午後 3:52** に作成された 1 つの完全（ベース）ファイルレベルのバックアップで構成されています。2 番目のアーカイブは、1 つのベース ファイルレベルのバックアップと 2 つの増分バックアップで構成されています。次のような方法で、任意のバックアップからデータを復元できます。

```
trueimagecmd /filerestore /asz:2 /index:2 /target_folder:e:
```

このコマンドは、2009 年 4 月 4 日午後 6:31 に作成されたバックアップから、パーティション E のルートへの元のパスを使用してファイルとフォルダを復元します。

```
trueimage /list /filename:asz://2 /index:3 /password:aszpw
```

このコマンドの動作は次のコマンドと同じです。

```
trueimagecmd /list /asz:2 /index:3 /password:aszpw
```

このコマンドは、パスワード aszpw で保護された Acronis セキュア ゾーンにある、アーカイブ番号 2 に作成された 3 番目のバックアップの内容を表示します。

Acronis セキュア ゾーン: ファイル名によるバックアップの管理

- 次のコマンドは、Acronis セキュア ザーンのサイズ、空き領域、および内容を表示します。

```
trueimagecmd /asz_files /password:aszpw
```

Acronis セキュア ザーンの内容が次のようになっていますとします。

```
C:\Program Files\Acronis\BackupAndRecovery>trueimagecmd /asz_files
/password: aaa
ASZ size: 5.387 GB
ASZ free space: 4.363 GB
FILE name: AAA2.TIB; size: 56414317 byte
    type: image, base; creation time: 2/16/2009 3:43:34 PM
    type: image, incremental; creation time: 4/25/2009 11:44:47 AM
FILE name: FAAA.TIB; size: 3125550 byte
    type: file, base; creation time: 8/22/2009 12:28:40 PM
FILE name: FAAB2.TIB; size: 5147 byte
    type: file, base; creation time: 8/14/2009 2:17:45 PM
    type: file, incremental; creation time: 8/15/2009 2:19:43 AM
```

この例では、Acronis セキュア ザーンに 2 つのアーカイブが含まれています。

アーカイブ AAA2 (2 はアーカイブ内のバックアップの数を示します) は、次のバックアップで構成されています。

- 2009 年 2 月 16 日午後 3:43 に作成された完全（ベース）イメージのバックアップ
- 2009 年 4 月 25 日午前 11:44 に作成された増分バックアップ

アーカイブ FAAA (F はファイル レベルのアーカイブであることを示します) には、ベース ファイル レベルのバックアップが 1 つ格納されています。

アーカイブ FAAB2 (B はセキュア ザーンの 2 番目のファイル レベルのアーカイブであることを示します) は、次のバックアップで構成されています。

- 2009 年 8 月 14 日午後 2:17 に作成された完全（ベース）ファイル レベルのバックアップ
- 2009 年 8 月 15 日午前 2:19 に作成された増分バックアップ

```
trueimagecmd /filerestore /filename:asz://FAAA /target_folder:e:
/password:aszpw
```

このコマンドは、FAAA のベース バックアップのみから、パーティション E のルートへの元のパスを使用してファイルとフォルダを復元します。

```
C:\Program Files\Acronis\BackupAndRecovery>trueimagecmd /filerestore
/filename:asz://FAAA /target_folder:e: /password:aaa
[#####] 100%
```

処理が成功しました。

Acronis セキュア ゾーン: バックアップの削除

- 次のコマンドは、FAAB アーカイブ内の最新のバックアップを削除します。

```
trueimagecmd /asz_delete_files /password:aszpw /filename:FAAB.tib
```

Acronis セキュア ザーンの内容が次のようになっているとします。

```
C:\Program Files\Acronis\BackupAndRecovery>trueimagecmd /asz_files
/password: aaa
ASZ size: 5.387 GB
ASZ free space: 4.363 GB
FILE name: AAA2.TIB; size: 56414317 byte
    type: image, base; creation time: 2/16/2009 3:43:34 PM
    type: image, incremental; creation time: 4/25/2009 11:44:47 AM
FILE name: FAAA.TIB; size: 3125550 byte
    type: file, base; creation time: 8/22/2009 12:28:40 PM
FILE name: FAAB2.TIB; size: 5147 byte
    type: file, base; creation time: 8/14/2009 2:17:45 PM
    type: file, incremental; creation time: 8/15/2009 2:19:43 AM
```

上記のコマンドを実行すると、2009 年 8 月 15 日午前 2:19 に作成された増分バックアップが削除されます。

次回同じコマンドを実行すると、ベースの FAAB バックアップが削除されます。引き続き名前 FAAA と AAA についてこのコマンドを実行すると、最後に残る削除できないベースのバックアップを除き、Acronis セキュア ザーンを消去できます。

クローン

- 次のコマンドは、ハード ディスク 2 のクローンをハード ディスク 3 に作成します。

```
trueimagecmd /clone /harddisk:2 /target_harddisk:3
```

イメージの参照

- 次のコマンドは、ネットワーク ドライブのファイル mybackup.tib に仮想ドライブとして格納されているすべてのイメージに接続します。

```
trueimagecmd /explore /filename:\\myserver\backup\mybackup.tib
/net_user:john /net_password:qwerty
```

1.2 ストレージ ノード コマンドライン ユーティリティ

StorageNodeCmd コマンドライン ユーティリティは、集中管理対象の格納域に保存されているアーカイブの表示とエクスポート、およびそれらの格納域へのアーカイブのインポートを行うツールです。

このユーティリティは、ストレージ ノードがインストールされているコンピュータでのみ実行可能で、そのストレージ ノード(このセクションではローカル ストレージ ノードと呼びます)によって管理されている集中管理対象の格納域に対してのみ機能します。

同様の機能を備えた **trueimagecmd** ユーティリティとは異なり、**StorageNodeCmd** ユーティリティの場合、コンピュータにエージェントがインストールされている必要はありません。

1.2.1 サポートされるコマンド

StorageNodeCmd ユーティリティは、次の構文で使します。

```
StorageNodeCmd /command /option1 /option2 ...
```

コマンドにはオプションを指定できます。

コマンド	必須オプション	その他のオプション
list 集中管理対象の格納域の内容や、そこに保存されているアーカイブの一覧を表示します。	<code>/vault:[管理対象の格納域]</code>	<code>/arc:[アーカイブ名]</code> または <code>/arc id:[アーカイブの UUID]</code> のどちらか <code>/password:[パスワード]</code> <code>/credentials:[ユーザー名]:[パスワード]</code>
export 集中管理対象の格納域のアーカイブ(またはそこに保存されている 1 つ以上のバックアップ)を、ローカル フォルダまたはネットワーク フォルダにエクスポートします。	<code>/vault:[管理対象の格納域]</code> <code>/arc:[アーカイブ名]</code> または <code>/arc id:[アーカイブの UUID]</code> のどちらか <code>/target_vault: フォルダ名</code>	<code>/include_pits:バックアップ番号の一覧</code> <code>/password:[パスワード]</code> <code>/credentials:[ユーザー名]:[パスワード]</code> <code>/target_arc:[アーカイブ名]</code> <code>/target_credentials:[ユーザー名]:[パスワード]</code> <code>/progress:{on off}</code> <code>/log:[ログ ファイル名]</code> <code>/log_net_user:[ユーザー名]</code> <code>/log_net_password:[パスワード]</code>
import ローカル フォルダまたはネットワーク フォルダのアーカイブを、集中管理対象の格納域にインポートします。	<code>/vault:[フォルダ名]</code> <code>/arc:[アーカイブ名]</code> または <code>/arc id:[アーカイブの UUID]</code> のどちらか <code>/target_vault:[管理対象の格納域]</code>	<code>/password:[パスワード]</code> <code>/credentials:[ユーザー名]:[パスワード]</code> <code>/target_credentials:[ユーザー名]:[パスワード]</code> <code>/progress:{on off}</code> <code>/log:[ログ ファイル名]</code> <code>/log_net_user:[ユーザー名]</code> <code>/log_net_password:[パスワード]</code>
help 使用方法の情報を表示します。	なし	なし

1.2.2 オプション

このセクションでは、**StorageNodeCmd** コマンドライン ユーティリティで使用するオプションの一覧を示します。

arc および arc_id

arc オプションでは、アーカイブの名前を指定します(例: `/arc:"My Archive"`)。

格納域に、指定した名前を持つアーカイブが複数含まれる場合は、その名前で最初に見つかったアーカイブが使用されます。最も古いものや最も新しいものとは限りません。同じ名前のアーカイブがいくつか存在する場合は、このオプションではなく、**arc_id** オプションを使用することを検討します。

arc_id オプションでは、`/arc_id:183DE307-BC97-45CE-9AF7-60945A568BE8` のように、アーカイブの UUID (Universally Unique Identifier)を指定します。

管理対象の格納域に保存されているアーカイブの UUID を表示するには、**list** コマンドを使用します。たとえば、次のように指定します。

```
StorageNodeCmd /list /vault:"bsp://My Storage Node/MyVault"
```

これらのオプションの 1 つだけを指定します。両方指定されている場合は、**arc_id** オプションが使用されます。

credentials

vault オプションで指定された名前の場所(管理対象の格納域またはフォルダ)にアクセスするためのユーザー名とパスワードを指定します(例: `/credentials:"MyDomain\User A":"My PassWd123"`)。

include_pits

arc オプションまたは **arc_id** オプションで名前を指定したアーカイブについて、エクスポートするバックアップの一覧(ピットとも呼ばれます)を指定します(例: `/include_pits:0,4,5`)。

数値 **0** は、アーカイブ内の最新のバックアップを表します。

バックアップ番号の区切りにはカンマを使用します。アーカイブのバックアップ番号の一覧を表示するには、**list** コマンドを使用します。たとえば、次のように指定します。

```
StorageNodeCmd /list /arc:"My Archive" /vault:"bsp://My Node/My Vault"
```

このオプションを指定しないと、アーカイブ全体がエクスポートされます。

バックアップのエクスポート方法の詳細については、ユーザーズ ガイドの「アーカイブとバックアップのエクスポート」をご参照ください。

log

現在の操作のログを保存するファイルの名前を指定します(例: `/log:"\\Server\Share\Exporting Log.txt"`)。

ネットワーク共有上にファイルを作成する場合は、**log_net_user** オプションと **log_net_password** オプションを使用して、その場所に対するアクセス ログイン情報を指定します。

log オプションを指定しないと、ログは作成されません。

log_net_password

log_net_user オプションで指定した名前のユーザーのパスワードを指定します (例: `/log_net_password:"My PassWd123"`)。

log_net_user

log で指定した名前のファイルにアクセスするログイン情報を指定します (例: `/log_net_user:"User A"`)。

password

パスワードで保護されたアーカイブ名を **arc** または **arc_id** で指定した場合の、パスワードを指定します (例: `/password:"My PassWd123"`)。

このオプションは、アーカイブがパスワードで保護されていない場合は無視されます。

progress

エクスポートまたはインポートの処理の進行状況を表示 (`/progress:on`) するか、非表示 (`/progress:off`) にするかを指定します。

このオプションを指定しないと、進行状況が表示されます。

target_arc

エクスポート先のアーカイブの名前を指定します (例: `/target_arc:"Exported Archive"`)。

このオプションを指定しないと、エクスポート先のアーカイブには元のアーカイブと同じ名前が付けられます。

target_credentials

target_vault オプションで指定された名前の場所 (管理対象の格納域またはフォルダ) にアクセスするためのユーザー名とパスワードを指定します (例: `/target_credentials:"MyDomain\User A":"My PassWd123"`)。

target_vault

export コマンドと共に使用する場合は、アーカイブのエクスポート先になるローカル フォルダまたはネットワーク フォルダを指定します (例: `/target_vault: \\Server\Share`)。

import コマンドと共に使用する場合は、インポートするアーカイブの保存先となる集中管理対象の格納域を指定します。この格納域はローカル ストレージ ノードによって管理されている必要があります。格納域の名前は URI (Universal Resource Identifier) で指定します (例: `/target_vault:"bsp://My Storage Node/MyVault"`)。

vault

list コマンドと共に使用する場合は、アーカイブ (または個々のアーカイブの内容) を表示する集中管理対象の格納域を指定します。

export コマンドと共に使用する場合は、エクスポートするアーカイブが含まれる集中管理対象の格納域を指定します。

どちらの場合も、この格納域はローカル ストレージ ノードによって管理されている必要があります。格納域の名前は URI (Universal Resource Identifier) で指定します (例: `/vault:"bsp://My Storage Node/MyVault"`)。

import コマンドと共に使用する場合は、インポートするアーカイブが含まれるローカル フォルダまたはネットワーク フォルダを指定します(例: `/vault: \\Server\Share`)。

1.2.3 例

ここで示す例は、以下のことを前提としています。

- ストレージ ノードがインストールされているコンピュータで **StorageNodeCmd** ユーティリティを実行している。
- ストレージ ノードの名前は **My Node** である。
- このストレージ ノードは、**My Vault** という名前の集中管理用格納域を管理している。

格納域のアーカイブの一覧表示

次のコマンドでは、格納域に保存されているアーカイブの一覧が表示されます。

```
StorageNodeCmd /list /vault:"bsp://My Node/My Vault"
```

出力は次のようになります。

```
Archive name: My Archive
```

```
type: image; owner: domain/sample_user; machine: sample-comp; date: 6/27/2009 11:39:10 AM; used_space: 1000000000; id: 183DE307-BC97-45CE-9AF7-60945A568BE8
```

```
Archive name: My new Archive
```

```
type: file; owner: domain/sample_user; machine: sample-comp; date: 6/27/2009 11:50:10 AM; used_space: 2000000000; id: 283DE307-BC97-45CE-9AF7-60945A568BE8
```

```
Archive name: The last Archive
```

```
type: image; owner: domain/sample_user; machine: sample-comp; date: 6/27/2009 11:20:10 AM; used_space: 3000000000; id: 183DE307-BC97-45CE-9AF7-60945A568BE8
```

アーカイブ内のバックアップの一覧表示

次のコマンドでは、**My Archive** アーカイブに含まれるバックアップの一覧が表示されます。ここでは、アーカイブは名前ではなく UUID (Universally Unique Identifier)で指定しています。前の例の出力をご参照ください。

```
StorageNodeCmd /list /vault:"bsp://My Node/My Vault" /arc_id:183DE307-BC97-45CE-9AF7-60945A568BE8
```

出力は次のようになります。

```
Pit number: 1
```

```
type: image; kind: full; date: 6/27/2009 11:39:10 AM
```

```
Pit number: 2
```

```
type: image; kind: incremental; date: 6/27/2009 11:43:13 AM
```

```
Pit number: 5
```

```
type: image; kind: incremental; date: 6/28/2009 11:12:19 AM
```

ピット番号は、アーカイブ内のバックアップを識別するものです。ピット番号を使用することで、アーカイブ全体をエクスポートするのではなく、アーカイブの個々のバックアップをエクスポートできます。

アーカイブのエクスポート

次のコマンドでは、**My Archive** アーカイブが **C:\Archives** フォルダにエクスポートされます。

```
StorageNodeCmd /export /vault:"bsp://My Node/My Vault" /arc:"My Archive" /target_vault:"C:\Archives"
```

アーカイブの最新バックアップのエクスポート

次のコマンドでは、**My Archive** アーカイブの最新のバックアップがエクスポートされます。最新のバックアップは、それ自体のピット番号に加えて、ピット番号 **0** で識別されます。エクスポートされたバックアップは、**Exported Archive** アーカイブ内の **C:\Archives** フォルダに保存されます。

```
StorageNodeCmd /export /vault:"bsp://My Node/My Vault" /arc:"My Archive" /include_pits:0 /target_vault:"C:\Archives" /target_arc:"Exported Archive"
```

アーカイブのインポート

次のコマンドでは、**C:\Archives** フォルダの **Archive 1** アーカイブが格納域にインポートされます。

```
StorageNodeCmd /import /vault:"C:\Archives" /arc:"Archive 1" /target_vault:"bsp://My Node/My Vault"
```

1.2.4 格納域のエクスポートと複数のアーカイブのインポート

管理対象の格納域に保存されているすべてのアーカイブをエクスポートする場合や、フォルダのアーカイブをすべて管理対象の格納域にインポートする場合は、Acronis Backup & Recovery 10 ストレージ ノードと共に提供されているスクリプトを使用できます。

これらのスクリプトは、ストレージ ノードがインストールされたフォルダ内にあります。デフォルトでは、**C:\Program Files\Acronis\StorageNode** です。

パスワード保護されたアーカイブは、エクスポート時やインポート時にはスキップされます。

管理対象の格納域にあるすべてのアーカイブをフォルダにエクスポートする手順は、次のとおりです。

1. スクリプトがあるフォルダに移動します。
2. アーカイブのエクスポート元となる格納域と、それらのエクスポート先となるローカル フォルダまたはネットワーク フォルダを指定して、次のように **VaultExport.js** スクリプトを実行します。

```
cscript.exe VaultExport.js /source_vault:"bsp://My Node/My Vault" /target_vault:"C:\Archives"
```

フォルダにあるすべてのアーカイブを管理対象の格納域にインポートする手順は、次のとおりです。

1. スクリプトがあるフォルダに移動します。
2. アーカイブのインポート元となるローカル フォルダまたはネットワーク フォルダと、それらのインポート先となる管理対象の格納域を指定して、次のように **VaultImport.js** スクリプトを実行します。

```
cscript.exe VaultImport.js /source_folder:"C:\Archives" /target_vault:"bsp://My Node/My Vault"
```

スクリプトのオプション

VaultExport.js スクリプトには、**source_vault**、**source_credentials**、**target_vault**、および **target_credentials** のオプションがあります。

VaultImport.js スクリプトには、**source_folder**、**source_credentials**、**target_vault**、および **target_credentials** のオプションがあります。

どちらのスクリプトの場合も、これらのオプションはそれぞれ、**StorageNodeCmd** ユーティリティの **vault**、**credentials**、**target_vault**、および **target_credentials** オプションと同じです。

1.3 スクリプト処理

スクリプト処理はバックアップのみを対象としています。

1.3.1 スクリプト実行パラメータ

スクリプトは、Acronis Backup & Recovery 10 インストール フォルダ (C:\Program Files\Acronis\BackupAndRecovery)にある **TrueImageTerminal.exe** ユーティリティによって実行されます。このユーティリティは、バックアップの進行状況の監視にも使用されます。

TrueImageTerminal 実行パラメータ:

```
TrueImageTerminal.exe [引数]
```

引数には、次のものがあります。

/help - TrueImageTerminal.exe のパラメータに関するヘルプ情報を出力します。

/progress - Acronis Backup & Recovery 10 グラフィック ユーザー インターフェイスまたはスクリプトで実行するバックアップ処理の進行状況を出力します。

/execute: [スクリプト ファイル名] - スクリプトを実行します。実行するスクリプトが複数あるときは、待ち行列に入れられます。次の例は MyBackup.tis スクリプトを実行します。

```
TrueImageTerminal.exe /execute:C:\MyBackup.tis
```

/nowait - オプションのスクリプト実行引数です。バックアップが完了する前に TrueImageTerminal を終了することができます。例:

```
TrueImageTerminal /execute:C:\MyBackup.tis /nowait
```

[Ctrl+C] キーを押すと、バックアップの進行状況の出力を強制的にオフにして、TrueImageTerminal をバックグラウンド処理に切り替えることができます。

TrueImageTerminal によって実行されたバックアップ処理は、**[Ctrl+B]** キーを押すと終了できます。

1.3.2 スクリプトの構造

スクリプトは XML 言語を使用して記述し、次のタグを使用することができます。

- source 『37ページ』
- target 『37ページ』
- options 『37ページ』

source

イメージを作成するパーティションまたはディスクを指定します。パーティションに割り当てられているドライブ文字は、コロンを付けずに使用する必要があります。ディスク番号はシステム番号に対応します。複数のパーティションまたはディスクのイメージを作成するには、次のようにそれぞれに対して SOURCE タグを使用します。

```
<source letter ="C" />
<source letter ="D" />
<source disk ="1" />
<source disk ="2" />
```

target

イメージ ファイルの名前と場所を次のように指定します。

```
<target file="E:\Mybackup2.tib" username="username" password="password" />
```

username と **password** パラメータはオプションです。これらのパラメータは、ネットワーク リソースにアクセスするときに使用します。

イメージ ファイルの作成先として、CD-R/RW またはテープ ドライブを指定することができます。

options

このタグは、次のようなさまざまな追加パラメータと共に使用することができます。

Compression

バックアップの圧縮レベルを指定します。 **None**、**Normal**、**High**、**Maximum** を設定できます。

Incremental

増分イメージ ファイルを作成する必要があるかどうかを指定します。「false」(または「0」)のときは、完全イメージ ファイルが作成されます。指定した名前のファイルが既に存在するときは、警告されることなく置き換えられます。「true」(または「1」)で、指定した名前のファイルが既に存在するときは、増分イメージが作成されます。それ以外のときは、完全イメージ ファイルが作成されます。このパラメータのデフォルト値は「true」です。

Description

イメージ ファイルに説明を追加します。コメントは単一の文字列にする必要があります(長さに制限はありません)。

Split

大きいイメージ ファイルを、指定したサイズの複数の小さいファイルに分割します。サイズには、バイト、KB、MBなどを指定できます。

Password

パスワードによる保護をイメージ ファイルに追加します。

1.3.3 スクリプトの使用例

次の例は、2 つのパーティション(論理ドライブ)C と F をバックアップするスクリプトの使用方法を示しています。**mybackup2.tib** は、増分イメージ ファイルとして指定されています。高圧縮レベルが選択され、イメージは CD-R/RW メディアに書き込むために 650MB 単位で分割されます。パスワードによる保護も追加されます。スクリプト全体は、**<backup>** タグと **</backup>** タグの間に記述する必要があります。

```
<? xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<backup>
<source letter ="c" />
<source letter ="f" />
<target file="e:\mybackup2.tib" />
<options compression="high" incremental="true" description="これは個人用のバックアップです"
  split="650 Mb" password="" />
</backup>
```

テープにバックアップするスクリプトは次のようになります(tapeN はテープ番号を指定します)。

```
<? xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<backup>
<source letter ="c" />
<source letter ="f" />
<target cdrw="\taperecorder\\.\tape0|||" />
<target cdrw="\taperecorder\\.\tape1|||" />
<options compression="high" incremental="true"
  description="これは個人用のバックアップです" />
</backup>
```